○兵庫縣國寶圖錄

兵庫縣廳編

兵庫縣下は其の管内が廣いためと、王畿に近い土地柄とのために、國寶の數は恐らく京都及び奈良に次いでの數であらうし、其の種類も可なり複雜であり、且つ其の所在地を明かにする事が、幾多の新智見を齎す事にもなるものである。

今回、兵庫縣に於ては、縣下に所在するだけの國寶を、一册の圖錄に纒めて上梓されたのが即ち本書であるが、國寶圖錄と言へば、嵩の大きな持ち運びに不便なものでもあるかに思はれるが、これは全く然らずして四六版の寔に手頃のサイヅである事が第一に嬉しい。そして編輯に非常に苦心が拂はれて居つて、圖版の右側に解說の來る樣に仕組まれて居り、其の前頁には、其等の國寶を所有する神社寺院の由緒緣起が記されて居り觀る者をして、其の國寶の存在する背景を知るに便ならしめてある。

國寶圖版に附せられた解說は數行のもので極めて簡單であるけれども至つて明白で、且つ何時代のものであるかを明記してある事は、敎へらるゝ所が大きいし、其の社寺に到る交通關係が親切に示してある事も、他に類例を求め得られない重寶なものである。解說は、魚澄惣五郎、武藤誠、吉井太郎の三氏が當られた。非賣品である事が、惜しい樣な氣がする。〔中村〕

○山村生活の研究

柳田國男編

近時に於ける民俗學界は著しい發展の過程を辿つてゐる。就中柳田國男氏を中心とする民間傳承の會の活動は注目すべきものであつて、斯學研究の主流と稱するも決して過評ではなく、その業績は賞讃に値するものと云へる。成立二ヶ年にして全國各府縣に千名に亞とする會員を擁し、東京、大阪に於ける長期講習會、又各地には講演會を頻に開催し、機關誌民間傳承を月刊する外にも幾多の報告書、語彙、調査手帖等の出版を行ひ、啓蒙と向上とあらゆる方面に於いて民俗學界に貢獻するところが甚大である。本書も亦同會によつて近く世に送られた學界待望の巨編であつて、柳田先生の指導の下に鄉土生活研究所の諸君即ち所謂木曜會の同人の勞作に係るものである。

「日本僻陬諸村に於ける鄉黨生活の資料蒐集調査並びにその結果の出版」なる名義によつて、日本學術振興會の援助の下に三ヶ年五十ヶ村の山村調査の着手されたのは昭和九年四月のことであつた。その以前の民俗學とは概ね個人的旅行によつて得られた、或ひは地方の所謂鄉土史家の報ずる珍奇な習俗の蒐集に過ぎず、そこには依然として近世の耽奇癖が漂り、學の名を冠して呼ぶには僭越極る狀態に沈淪してゐたのである。

柳田先生はこの混迷の外に獨り高く、鄉土研究社以來の組織的研究の重要性を主張し、日本民俗學の建設に精進されたが、

こゝに眞實なる人間生活の解明に志す十數名の眞摯な青年學徒を以つて、最初の集團的調査を實行されたのである。調査に從事した各人に於いては必ずしも傾向を一にするとは云へないが、豫め柳田先生より必要なる民俗學的基礎概念を與へられ、且つ一定の調査項目を選定し、これを中心として共同作業に當つたのである。我が國最初の民俗學的概論書なる民間傳承論は先づこれらの諸君に讃ぜられたるものであり、調査項目も亦その後の體驗によつて年次毎に是正され、鄕土生活研究採集手帖として第三版まで公にされ、共に普く民俗學徒の調査研究の指導書として重んぜられてゐる。

調査の實際に就いては私も度々調査員に隨伴して、その全體的な精密な觀察と採集とには敬服措く能はざるところである。調査の進捗するに從つて、十年三月、十一年三月の兩度に中間報告を行ひ、大なる反響を與へたが、今その綜合的結果が而も十餘名の地方篤學者の協力を得て公にされるに至つた。洵に欣懷の至りである。

本書は云ふまでもなく報告書である。六十五項目に分つて我が國山村の生活、村落共同體の持つ生活形相、それに與る心意が現代の生きた眞實の姿に於いて記錄されてゐる。而もこれは又彼等の祖先の永き生活の迹であつて、この方法以外には探求の道なくして今日まで顧られなかつたところでもあつた。加之卷末には編者の「山立と山伏」なる一文を加へ、山に人生を求めた古への同胞の永遠の生命を探り、併せて本調査の概觀、民俗學の方向を示して、本書の價値を一層重からしめてゐる。卽ち本書の出現は民俗學の一大支柱として、その發展の有力なる地盤を開拓したものであつて、同學の士にとつて最大の恩惠である。更に又廣く人文諸科學に携る人々、或ひはこの國の國民生活に深き關心を有する人々にとつても最良の指針であり、反省の資でもあらう。

たゞ本書の持つ意義を深く考慮することによつて、若干の私見を申し添へるならば、先づ調査の目的物なる村の概念であるが、村と云ふ場合に民俗學の對象とするところは現法規によつて理解される村ではなくして、舊制度の下に永く保たれた村落共同體卽ち主として現在の大字に相當する集團でなければならぬ。これは既に民俗學的常識であつて、あらゆる民俗事象はこの地盤に存在し、且つその制約を避けることは許されない。然るに本書には多く字名を記すことがない。これは省略したものであらうか。或ひは村によつて悉く同一民俗が保有されてゐることを意味するものであらうか。民俗資料に就いて往々その眞實性が問題になるが、それが文字を唯一の知識獲得の手段と考へる人々によつてなされるものであるとしても、我々はなほ資料の根據を能ふ限り正確にしなければならぬと思ふ。次ぎに調査村落に就いての解說が見られないことである。調査村が悉く「一府縣一箇所以上、互ひに若干の距離を有して隔離され、且つ比較的交通機關に惠まれず、所謂世間との往來の制限せられたる村落、然も從來生活調査の未だ試みられざる」山村——事

實は四十何箇所まではたゞ奥まつた農村であつた――であつても、このことは調査すべき外部的條件であつて、調査された村の性格を示すものではない。心意生活を理解するには村人の宗教關係を無視することは出來ぬ。又常食物に就いても、村人の生産狀態、身分關係を知らずして正しき認識は不可能である。又本調査は一定の採集手帖を基礎として行はれたものである。百の事項が民俗學に於いて重要價値を有することは言ふまでもない。從つて尠くとも手帖に記された項目に就いては檢討がなされたものであると信ずる。一方村人の側から考へれば、質問される事象に關しては反省の機會を與へられたことになり、事實の有無、又その變遷の過程が意識されるのは極めて自然である。記憶の內容が絕對的な眞實であり、變遷の全體であるとは必ずしも認定し得ないとしても、存在しない、或ひは減びたと云ふが如き歷史的展開の過程は重要な問題を含んでゐる。この點に關して本書が報告すること少いのは甚だ遺憾に堪へないところである。最後に資料整理の方法に就いてゞあるが、こゝでは資料は論理を壓倒してゐる。本書に見られる分類は先に示された民間傳承論、もしくは鄕土生活の研究法の持つ資料整理分類の方法の如く組織的ではない。一に平面的な採集手帖の設問に依據してその解答の如き體裁を有してゐる。併しながら手帖は要するに資料探求の便宜を目的としてゐて、それが直ちに民俗學の體系を示すものとは考へられない、資料に對して餘りにも謙讓であり過ぎた嫌があると云へよう。

かく云へばとて、本報告書に記錄された資料の價値は絕大なものであつて、安價な憐憫と無智な輕視との裡にあつて、一村に三週間づゝ僻陬山村に起居して、この未だ職業化せざる學問に對して捧げられた木曜會同人の純粹な熱情と僅少の時間にかゝる精密な調査を遂げた力倆とに對して全服的な敬意を表し、併せて今後のかはらざる指導と協力とを冀ふ次第である。（菊判、五六二頁、一・九〇、民間傳承の會發行）〔平山〕

○鈴木春山兵學全集

佐藤堅司編

本全集は幕末、三河田原藩にありて、渡邊華山、伊藤鳳山と共に三山と稱せられた、鈴木春山の西洋兵學の飜譯書「兵學小識」「三兵活法」「海上攻守略說」の三つを收めて居る。

春山、名は强、字を自强、號を童浦と云つた。春山は其の通稱で、享和元年、田原に生る。家は父祖以來醫を以て、田原藩主、三宅氏に仕へた。而して、春山又醫を學び、後前後二回長崎に遊び、醫學及び蘭學を學び後江戸に出で、西洋兵書の飜譯に力を盡したもので弘化三年四十六歲にて、江戸に歿した。

序に依れば本全集編纂に付いては、春山の孫鈴木菊子刀自の懇望に依り、昭和九年秋より佐藤堅司氏が編纂に當られたのであつて、爾來二年有半の期間、不撓不屈の精神を以てあらゆる方法を盡し、春山及び其の飜譯書に付研究された結果、本全集には前記三飜譯書の他に卷初に、鈴木家略系圖・鈴木春山年譜